PROFILE

人物白書

vol. 22

氏名 肱岡 隆之（ひじおか たかゆき）

所属部署 営業1部 名古屋営業所

担当エリア 中部、北陸、長野

【座右の銘】

納得してから仕事をしよう。さもなくば目標達成は難しい

尊敬する上司が営業部へ掲示した「心得」。なぜそうするのか、なぜそうしなければならないのか、納得してから仕事に取り組む事で、相手への伝える言葉が異なり、結果は変わる。

【出身地】

神奈川

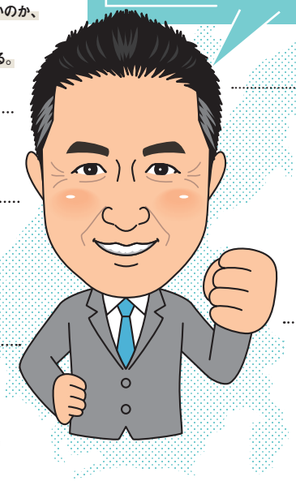
【趣味】

ゴルフ

Message

お客さまへのメッセージ

「ああしたい」「こうしたい」なんでも結構ですので、お気軽にご相談ください。アピール下手ですが、いろいろなことをやっており、お客さまのお役に立てると思います（忖度しますが《笑》）。



【好きなもの】

読書（99%まんが）

最近のおすすめは「エマージング」。2004年に発売された漫画ですが、今回の新型コロナウイルスに対する病院現場の葛藤と政府の対応の描写が怖いくらいに予言されていますよ。

【長所・ウリ】

いつでも、どこでも、すぐ寝られる

【嫌いなもの】

度を超えた困難やストレス

お客さまに言われて嬉しかった一言

“いざという時、頼りになるよね。勝手に忖度（そんたく）するけど（笑）”

私の後任担当者が、お客さまと会話した際の言葉です。
以前、私が担当していたお客さまが、前任者からの引継が不十分で困っていらしたことがありました。
その際、イチからご説明差し上げたのですが、その時のことをおっしゃってくださったようです。
「着任当時、肱岡さんに迅速で分かりやすい丁寧な対応をしていただき、本当に助かった。
でも、平常時の対応とのギャップが激しいよね（笑）」ともおっしゃっていたようです……。

FOCUS 商品・サービスインフォメーション

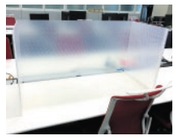
22 デスクパーテーション

飛沫を防ぎリスク低減

抗菌剤配合「ぱぱっとウォール」

軽量&高剛性
「デスクウォールクリア」

透明度抜群
「コロナガードV」



折り畳み簡単
「飛沫防止パネル」

商品特徴	
ぱぱっとウォール	抗菌剤配合。仕切り板はハニカム構造で堅牢。半透明仕様で圧迫感を軽減。
デスクウォール クリア	軽量かつ高剛性が自慢。自立式なら簡単に片手で持ち上げられ、掃除の時も便利。
コロナガードV	窓部分にPET樹脂を採用。透明度が抜群で、相手の表情を見てコミュニケーション可。
飛沫防止パネル	折り畳み式。広げて置くだけで3面をカバー。設置や収納を繰り返す環境には特におすすめ。

column

ニューノーマルの時代に向けて

これからのオフィス環境に、飛沫対策は重要です。その1つとして、デスクパーテーションをご紹介します。製品それぞれに特色があり、設置場所にあわせてお選びいただけます。詳しいご案内や設置例の写真は、JPRオンラインショップにてご覧になれます。

商品の詳細はこちらから

JPR 日本パレットレンタル株式会社

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービル URL www.jpr.co.jp e-mail service@jpr.co.jp

最新情報など詳しくはwebから！ 日本パレットレンタル

発行/2020年8月7日 編集/日本パレットレンタル株式会社 制作・印刷/DNP 大日本印刷株式会社

お客さまとJPRをつなぐ情報誌

JPR

VOL. 22
2020. Aug

物流と商流のデジタル化

物流と商流のデジタル化

私・恒吉 正浩が社会人になった1983年、事務所にはパソコンが並び始め（10人に1台ぐらい）、人事や経理の業務に徐々にシステムが導入されてきていました。その頃の物流部門は倉庫の在庫管理もまだ手集計でしたが、1990年代に入ってから倉庫管理システム（WMS）が導入されシステム化が始まりました。そこから40年弱で、物流と商流に関連する業務がどのようなデジタル化の道をたどってきたかを振り返りつつ、これからの道筋とそのポイントについて述べてみたいと思います。

恒吉 正浩

日本パレットレンタル株式会社 調査役

1983年に味の素株式会社に入社し、2004年より物流部門に在籍。関連会社でのシステム導入やシステム標準化に関連する活動も経験し、物流部門とシステム部門の両面の視点から、物流の全体最適化を志向する。2019年から日本パレットレンタル株式会社にて現職。

デジタル化のはじまり

物流と商流のデジタル化は同時に始まったわけではなく、物流よりも前に商流に関連する業務からデジタル化が始まりました。経理や営業関係の事務作業に早くからパソコンが導入されたこともありますが、特にデジタル化の象徴だったのが1980年代半ばから利用されだした「標準化されたフォーマットを使用したEDI」であり、卸からメーカーへの商品の発注に、複数のメーカーが共通のプラットホームを使うという当時としては画期的な取り組みでした。この取り組みをきっかけに、デジタル化と効率化が大きく前進し始めたと言っていいでしょう。その後、商流に関連するメーカーと卸間のデータ連携（EDI）は、1987年に出荷案内、販売実績に関する情報、1999年に販売促進関連と順調に拡大されていき、今では年間数十億件ともいわれる標準化されたデータが、メーカーと卸間でやり取りされています。

その間の物流のデジタル化ですが、先にふれたように倉庫管理のシステム化（WMSの導入）は順調に進みました。また個々のメーカーから物流事業者への指示（出荷指図等）もデータ連携されていきました。しかし、そのデータは各社が個別に最適化したものが多く、連携のためには物流事業者側での変換が必要となる場合が少なくありません。また、メーカーと卸、物流事業者と卸のやりとりは、現在に至るまで紙の納品伝票、出荷伝票が主流を占めています。

とはいえ、全くデジタル化・効率化されていないわけではなく、物流データとしては初めて標準化された「事前出荷情報（ASN）」は2014年頃から利用が開始されましたし、それ以外にも多くの効率化が成し遂げられています。

以下にBtoB物流の進化を一例であげてみました。

❶エリア別の委託物流化⇒❷エリアの中での物流の共同化⇒❸全国の物流管理の統合（エリア物流会社の統合）⇒❹物流子会社への権限委譲、独立化。

この❹では、物流業務を委託している多くのメーカーに共通化（物流管理のKPI、物流サービス）、効率化（コストダウン）という効果が見られます。ただ、3PL物流事業者間、メーカーと物流事業者間、物流事業者と卸間で共通なルールや標準化されたデータ連携は必ずしもできているとはいえません。

もちろん、商流においてもデータ連携はまだ不十分ですが、先に述べたようにやや先行しています。

データ連携と利活用への課題

物流においても商流においても、デジタル化の課題は、企業間や各層（メーカー、卸、小売）間の接続部分にあります。標準化されたデータでリアルタイムな連携が進めば、より一層データを活用できると考えます。

さらに一歩進んだ形でのデータ連携がなされると、業務の飛躍的な効率化を図れる可能性もあります。

商流においては、メーカー、卸、小売間で行われている書類の共通フォーマット化と共同保管、経理業務における請求や支払いに関する全てのデータ連携とペーパレス化、商品の品質情報や生産系の情報まで含めた共通データベース化が大きなテーマだと思います。

物流においては、納品や受領情報のデジタル化が、まず第一です。さらに商品の動きをリアルタイムでメーカー、物流事業者、卸が共有することにより、生産者から消費者までつなぐ、BtoB、BtoCをシームレスで行う物流が現実味を帯びてきます。

加えて、物流と商流の情報を連携することができれば、商品の発注から代金の支払い、照合までの取引全てを一気に効率化できる将来が訪れるかもしれません。

データをつなぐ未来の物流に向けて

これまで述べてきたように、今後の物流において「標準化」された「データ」をできるだけ「リアルタイム」に縦にも横にも「つなぐ」ことが大事なポイントです。

そして、より一層のサプライチェーン全体での最適化を進めていくためにはデータを共有するシステム同士をつなげ、俯瞰する一つの共有システムとして機能するような仕組みが必要となるでしょう。

2020年に入り、人手不足などの課題に加え、新型コロナウィルス感染症への対策などが相まって省人化や効率化へのニーズが急激に高まり、物流の進化を計らずも後押ししている状況かと思います。本誌で述べてきたデータをつなぐ未来の物流が実現するのも遠くないかもしれません。本稿が物流の進化の一助となれれば幸いですし、いち物流人として物流に携わっている間に、その進化の一端でも垣間見ることができればと願ってやみません。